

大学院看護学研究科看護学専攻	
学籍番号	DN1401
氏 名	上澤 弘美
学位の種類	博士（看護学）
学位授与年月日	2018 年 3 月 19 日
学位授与の要件	学位規程第 4 条第 2 項該当
論文題目	生命の危機的状況で初療に救急搬送された患者の家族が辿る代理意思決定のプロセスと看護実践の検討
主指導教員	中村 美鈴 教授
副指導教員	永井 優子 教授
	本田 芳香 教授
論文審査委員	主査： 成田 伸 教授
	副査： 春山 早苗 教授
	副査： 永井 優子 教授

最終試験の結果の要旨

1) 研究テーマの目的の明確性および広域実践看護学分野の目的との適合性

本研究は、生命の危機的状態で初療に救急搬送された成人患者の代わりに治療の意思決定を行った家族の代理意思決定のプロセスを明らかにしようとしたものである。初療における代理意思決定は多く、代理意思決定する家族に対する看護は十分とはいえない現状から、今回明らかとなった共通のプロセスを理解することで、代理意思決定する家族に対する看護実践能力の向上及び看護提供体制の向上が期待できる。これらの点で、本研究の目的は明確であり、広域実践看護学分野の目的にも適合している。

2) 研究の独創性・革新性

代理意思決定については、国内外の質的研究により、生命の危機状態にある患者の家族の体験や家族の思い等が明らかになっているが、初療において代理意思決定を担った家族の代理意思決定のプロセスを明らかにした研究はない。代理意思決定後まだ患者の状態が不安定な中で代理意思決定を担った家族へのインタビューによりそのプロセスを明らかにしようとした本研究は、独創性・革新性を有している。

3) 実践的意義、社会的意義

本研究で明らかとなった生命の危機的状態で初療に救急搬送された患者の家族が辿る代理意思決定のプロセスを看護師が理解することで、代理意思決定する家族に対する看護の提供や看護を含む救急医療体制の改善を図ることが可能となる。これらの点で、本研究は実践的意義、社会的意義を有している。

4) 研究方法の妥当性

本研究においては、佐藤郁哉氏の事例ーコード・マトリックスを分析方法として用いているが、1月5日の審査では、結果として示された定性的コード、焦点的コード、概念的カテゴリーの間にどのような抽象化がなされたかの論理や一貫性が読み取れなかったため、分析方法をより明確に記述することを求めた。1月30日の審査では、データの分析方法が追記され、定性的コード、焦点的コード、概念的カテゴリーを導き出す過程は示されたが、事例ーコード・マトリックスからプロセスを導く過程の記述は十分明確とはいえず、分析方法について、さらに明確に示す必要が指摘された。1月30日の審査においては、コードの根拠となるローデータが示され、定性的コード、焦点的コード、概念的カテゴリーにつながる抽象化を辿れるものとなったが、プロセスを導き出した過程の記述は十分とはいえず、事例に立ち戻って分析しプロセスが導き出されたという、実際の分析の過程を丁寧に示す必要があるとの指摘がされた。

これらの指摘を受けて、代理意思決定のプロセスについて、概念的カテゴリーを事例に立ち戻って検討した結果として3種類のプロセスを提示するという修正が加えられ、分析の過程が丁寧に示されるに至っており、研究方法は妥当であると判断した。

5) 引用文献の適切性

1月5日の論文審査では、引用文献は概ね適切であったが、Michaelを理論的基盤とする論拠が示されておらず、その論拠となる文献検討を加えることを求めた。1月30日の審査では、意思決定理論およびMichaelの意思決定プロセスについて文献検討が加えられ、Michaelの意思決定プロセスを研究の基盤とする論拠が示された。

6) 論文の体系、論旨の一貫性

1月5日の審査では、研究目的である意思決定プロセスが考察として示され、目的と結果の不一致について再考を求めた。1月30日の審査では、目的と結果が一致し、論旨の一貫性が認められた。しかし、研究の基盤としているMichaelの意思決定プロセスと本研究結果を比較した考察はなく、さらに考察を深める必要があるとの指摘がされた。

これらの指摘に対して、最終の論文においては、Michaelの意思決定プロセスと本研究結果を比較した考察が追加されており、研究全体としての一貫性が保たれるようになったと

判断した。

以上より、十分な修正が加えられ、博士論文の審査基準を満たしていることから、最終試験は合格とした。

以上